

教職大学院での実技を取り入れた授業の展開

—専門科目「危機管理の理論と事例演習」の事例—

宮崎大学大学院教職実践開発専攻 湯田 拓史ⁱ・坂元 巖ⁱⁱ

要旨

2020年度から宮崎大学教職大学院の教育行政・学校経営分野の院生が履修する選択科目「危機管理の理論と事例演習A（災害対応）」と「危機管理の理論と事例演習B（保護者対応）」は、実技を取り入れた授業として開講されている。クォーター制として災害対応のAと保護者対応のBとに分割して、それぞれ全8回の授業としている。Aでは不審者対応として「さすまた」の実技演習を実施している。Bでは模擬記者会見を実施し、マスコミ役による質問を経験できるようにしている。

実技を授業に取り入れた成果は、理論と実践の往還である。学部の教職課程での講義では、座学中心になりがちであったが、ストレート院生にとっては、学部で座学として学んだ危機管理の知識が実際に有効か否かを実体験することができる。現職院生にとっても、大学院で学ぶ原理としての「児童生徒の安全確保」と「アカウンタビリティの原則」を実践することの困難性を経験できるのである。

1. 授業の位置づけ

教職大学院での本授業の位置づけは次の通りである。2020年からクォーター制に対応した授業として、前期に「危機管理の理論と事例演習」のAとBでそれぞれ8回実施する各1単位の授業である。本講義の目的は、教育現場におけるリスク回避を学ぶことである。本講義での「リスク」概念の範囲は、「教育の営み」をする際に遭遇する可能性がある危険を広く指している。災害や事故だけでなく、保護者や地域住民との交流で起きるトラブルも含んでいる。ただし、対応の仕方が異なるので、講義「危機管理の理論と事例演習」は、AとBに分化している（以降、「危機管理の理論と事例演習A」を「演習A」。「危機管理の理論と事例演習B」を「演習B」と略記）。演習Aと演習Bは両方とも宮崎大学教育学部の教職課程必修講義「教育制度論」と教職実践基礎コースの「学校制度論」に対応している。とくに「学校制度論」の授業では危機管理の必要性と学校における危機管理計画を説明し、教職大学院でワークショップや実技を行って学校及び校区の実情に応じた改善がとれるようにしている。テキストは、演習Aと演習B両方とも日本大学の田中正博・佐藤晴雄『教育のリスクマネジメント—子ども・学校を危機から守るために』である。

演習Aの学習目標は、次の4点である。①学校の危機管理のうち、災害等の対応について、危機を予見してリスクを減らすための計画づくりの手立てを理解する。②教育公務員として学校危機管理について遵守すべきコンプライアンスを認識した上で、自らの役割を果たすことがで

ⁱ 宮崎大学大学院教育学研究科

ⁱⁱ 宮崎大学大学院教育学研究科

きる。③現職院生は、保護者・地域住民対応について勤務校や近隣学校の同僚に適切な指導助言ができる。④ストレート院生は、保護者・地域住民に対して教育公務員として適切な対応ができる。

演習Bの学習目標は、①学校の危機管理のうち、学校組織マネジメントを進める上で生じる保護者や地域住民へのアカウンタビリティ（説明責任）について理解する。②教育公務員として学校危機管理について遵守すべきコンプライアンスを認識した上で、自らの役割を果たすことができる。③現職院生は、保護者・地域住民対応について勤務校や近隣学校の同僚に適切な指導助言ができる。④ストレート院生は、保護者・地域住民に対して教育公務員として適切な対応ができる。

このように演習Aは、危機管理の基礎知識と危機対応への思考枠組みを重視している。一方で、演習Bはアカウンタビリティの原理に則った学校関係者や外部とのコミュニケーションを重視している。

2. 授業の概要

演習Aの授業スケジュールは、次の通りである。第1回は、オリエンテーションと基本概念の説明であり、第2回から第4回まではテキスト講読を中心としている。第5回は、「危機管理マニュアルの検討と改善」として、勤務校や実習校の危機管理マニュアルを検討して、評価と改善の指摘をおこなう。勤務校や実習校の危機管理マニュアルを読み込み、フェンス破損等の施設設備の欠点から、海岸線までの距離の短さといった地理的問題まで視野に入れて、マニュアル改訂案まで作成している。



第6回は、日本赤十字社の防災教育教材『まもるいのち ひろめるぼうさい』を使用して検討する。この教材は、日本赤十字社から全国の小中高等学校に2部ずつ無償配布されながら、あまり使用されていない。

教材としての「まもるいのち ひろめるぼうさい」の特徴は、災害別の内容であるだけでなく、校種別であり、小学校では低学年・中学年・高学年別になっているほどに発達段階に即して同内容でも異程度となっている。さらに本教材末に添付されたDVDには、災害についての映像資料や画像資料があるだけでなく、授業案も収録されており、学校現場で即利用できる状態となっている。

教職大学院の授業では、受講生の現職院生に対して、勤務校に戻った際に利用できるように指導している。

写真1 「まもるいのち ひろめるぼうさい」



写真2 「EVAG」のパッケージ

第7回は、防災教育教材の検討として、防災のための調査を専門とする国土防災技術株式会社が開発した防災教育教材『E v a g』(イーバグ)³⁾という教材を実際に使用して検討する。大雨災害時での避難行動を題材とした教材である。豪雨災害時での避難行動についての訓練をするカードゲームである。カードは「属性カード」を引いた後に、ステップ別に「情報カード」を引き、「避難アクションカード」で選択する。「避難支援カード」で公助と共助に頼ることもできる仕組みである。基本的に、ステップが進行するにつれて災害が深刻化していき、避難行動がしづらいようになっており、避難支援カードも公助は早々に無効化になる傾向がある。共助も限界に直面する。最終的に、なるべく早めのステップで避難所に行くのがベストである事を学ぶことができる。

使用に際しての注意点としては、公助・共助・自助の3区分を基本枠組みにしているが、「共助」は、地域の共同体によっては機能していないことがあるので、事実上「自助」が拡大している状況があることを説明する必要がある。これは、地域の共同体を同質的に捉えていることが問題である。授業では、学校教材として活用する場合の注意点も含めて指導している。

使用に際しての注意点としては、公助・共助・自助の3区分を基本枠組みにしているが、「共助」は、地域の共同体によっては機能していないことがあるので、事実上「自助」が拡大している状況があることを説明する必要がある。これは、地域の共同体を同質的に捉えていることが問題である。授業では、学校教材として活用する場合の注意点も含めて指導している。



写真3 さすまたの突きの練習 2020年撮影

第8回は、危機管理の実技演習として、刺股(以降、「さすまた」と略記)、エビペン、三角巾などの実技演習を行っている。

さすまたについては、(一社)全国警備業協会の『刺股操作要領』を参考にしつつ、実際に校舎内で不審者に見立てた演者を制圧するところまで実施している。

手順としては、「さすまた」での「突き」の練習から始めている。

基本的には上段突きと下段突きが中心となる。不審者の「喉」に対する上段突き、不審者の「すね」に対する下段突きが効果的である。突きの動作では腰をおとすのがポイントである。写真3のように、実施主体である教育行政・学校経営分野の教員の教育費で購入した備品である3本のさすまたを用いて、交代しながら受講生に練習させた。「さすまた」は、1本8千円程度で購入できる。さすまたには、複数の種類があるが、ア

ルミ製の軽量型が、女性院生でも負担なく使用できる。



写真4 さすまたのチームプレイ 2020年撮影



写真5 エピペンの実技 2020年撮影

不審者を壁に押しつけるよりも、転倒させる方が制圧しやすい。

さすまたは基本的に3人1組のチームプレイである。3人の内2人がおとりで、1人が背後から不審者に近づいて、不審者のひざ裏を突くことで転倒させる。

不審者の制圧には、さすまたを使うことも可能であるが、不審者の反撃リスクを考慮すると、可能な限り学校の備品であるテニスや卓球のネットを使うのが良い。

エピペンは、Viatrix 製薬のエピペン訓練用トレーナーを使用している。訓練用トレーナーは、事前予約すれば、Viatrix が無償貸与してくれる。ただし、使用後は返却する必要がある。

訓練用トレーナーには針がなく安全である。実技では、安全装置を外した後に、太ももの外側から押しつける動作を数回おこなう。

この他に、2021年度から、三角巾の使い方を加えた。三角巾は市販の三角巾を用いて、骨折時の応急措置を練習している。

危機管理の理論と事例演習Bでは、学校危機管理におけるアカウントビリティについて、保護者、子ども、マスコミへの説明の方法と改善の工夫について検討・検証する（ロールプレイング、ワークショップ）学校の危機管理のうち、学校組織マネジメントを進める上で生じる保護者や地域住民へのアカウントビリティ（説明責任）について理解する。

演習Bの授業スケジュールは次の通りである。第1回の内容は、オリエンテーションと基本概念の説明 各回でのテーマ説明と課題を示す。第2回から第4回はAと同様にテキスト講読である。第5回は「学校安全・危機管理のすすめ方2 -いじめ問題の情報の取扱」として、いじめ防止対策推進法での規定に基づき、教師として取るべき対応について学ぶ。いじめ問題についての教育委員会への報告と外部への情報公開の在り方について検討する。第6回は生徒指導分野の教員による「保護者・地域住民との円滑なコミュニケーション方法」として、児童生徒とは異なる保護者・地域住民とのコミュニケーション方法の違いを学ぶ。事前に生徒指導提要のコミュニケーション方法を読んだうえで、演習を行っている。第7回は「越境する教育実

実践「子どもの貧困と保護者対応」として、教育課程分野の教員による、子ども虐待や子どもの貧困にどう対応するか、保護者への対応の在り方を学ぶ。子どもの貧困問題について、宮崎県内のデータを確かしたうえで、演習を行っている。第8回は、「学校危機管理・安全管理とアカウントビリティ—保護者とメディアへの説明戦略と方法—」として、模擬記者会見を実施している。

3. 実技の意義と課題

演習Bでの模擬記者会見では、記者会見経験のある実務家教員（元教育次長）と記者会見の想定問答集作りの経験のある実務家教員（指導主事として大学院に出向）の協力のもと実施している。内容は、実技の前にアカウントビリティの重要性を学び、記者会見会場の間取り、マスコミへの通知文の作成、当日の質疑応答時の想定問答集作成を課している。当日の模擬記者会見では、教育委員会事務局勤務時代に実際に記者会見を経験したことがある実務家教員をマスコミ役とする。大学教員の記者会見経験は、次の通りである。

A教員（実務家教員） 元教育次長として、不祥事案件の記者会見を経験した。

B教員（実務家教員） 県の教育委員会で記者会見の想定問答集を作成した。

C教員（研究者教員） 大学制作電子コンテンツの記者会見を経験した。さらに、大学の広報担当で大手新聞の元論説委員による記者会見のレクチャーを受講した経験がある。

模擬記者会見では、予め作成した想定問答集で対応可能かどうか、応答時の姿勢や発言が適切かどうかをチェックする。緊張感を持ちながら、マスコミ役を納得させられる応答であったかどうか問われる。



写真6 模擬記者会見 2020年撮影

遠足で児童が蜂に襲われ5年生児童4名が怪我と仮定して、状況説明文とマスコミ通知文を記者会見で説明する学校側の院生に渡す。マスコミ役にはマスコミ通知文のみを渡す。

状況説明文は次の通りである。

2021（令和3）年5月8日午前10時頃、本校の小学校5年生の児童67名が参加する

遠足において、児童生徒5名がスズメバチに襲われ体を刺され、救急車でA病院に搬送された。病院からの連絡によると、児童5名のうち4名は軽症で手当を受けたとのことであるが、1名については目の付近を刺されたことから、今後の経緯を見る必要がある。

学校側は、5月9日に緊急の保護者会を開催して、一連の事実を保護者に知らせた。

しかしながら、5月11日の新聞報道では、「県内でスズメバチによる被害が相次いでいることから、市町村の各教育委員会が、今年4月に通学路や登山遠足のルートを確認するよう通知していたが、学校側は再確認を怠り、遠足を決行したのではないか」との記事がだされた。さらに、保護者会後に一部の保護者から、学校側がハチよけスプレーを持っていなかったなど、学校側の危機管理に不備があったのではないかという疑念が出て、SNSなどで拡散されてしまった。

以上の状況を鑑み、5月18日に学校側は記者会見を開催することにした。遠足から10日が経過していた。

なお、教育委員会には報告済みであり、教育委員会と記者会見に備えての事前打ち合わせと了解が取られている状況である。

マスコミ通知文は、前述の状況説明文のうち、前半部分の事実箇所のみを掲載した文章である。通常、市町村教育委員会が会見すべき内容であるが、後述する学校側の事情があり、それによりマスコミ対応に問題があったことから、市町村教育委員会ではなく、学校での記者会見となった。

模擬記者会見でのポイント

テキスト第5章「教育現場の危機管理広報」を受講した後に、模擬記者会見への準備に移行する。テキストでは、マスコミ対応の基礎知識を学び、とくに情報開示の大切さを認識した状態で模擬記者会見に臨むことになる。模擬記者会見では、記者側の質問として、大枠として「応急処置」「当日の安全対策」「今後の取組」の3つの質問が出されることが、事前に大学教員から説明される。

さらに模擬記者会見では、学校側には、どうしてもマスコミに知らせたくない事実があることを院生に説明する。今回の模擬記者会見でのマスコミに知らせたくない事実は次の通り。

実は、児童がスズメバチに石をなげつけるなど刺激を与えていた。

今後の取組みとして、遠足のコースの再確認をする。しかしながら、遠足のコースは創立以来同じコースであり、伝統を重んじる校風を鑑み、来年度以降も同様のコースで実施せざるをえない。

記者会見自体が遅れたのは、被害に遭った児童生徒の個人情報保護を最優先したからである。随行した教員の応急処置は、適切であり、当日までの安全対策として、2週間前に、遠足の下見をするなどの安全確認をしていた。当日は、教員がハチよけスプレー、抗ヒスタミン剤、ステロイド剤を所持していた。

今後の取組として、児童生徒へハチを刺激しないように周知徹底する。遠足のコースの再確認をすることが挙げられる。ただし、前述のように、遠足の場所とコース設定は同窓会からの強い要望で変更できず、再発防止で遠足のコース設定は変更できない。

以上の設定で模擬記者会見を行う。基本的には、1チーム3人でチームを組むが、受講生が2人以下の場合、マスター2年の院生を動員して補助してもらうか、大学教員が司会役をする。

チームを組んだら、前述の状況説明文を読み、質疑応答時での想定問答集を作成する。

記者会見時での共通の台詞は、「あいさつ」と「終了直前」の箇所であり、「あいさつ」はテキスト238-239頁の箇所をのべる。「終了直前」は、240頁を述べる。

なお、冒頭の謝罪では、お辞儀の角度等の姿勢とお辞儀の時間も指導対象となる。服装については、なるべくフォーマルな服装をすすめるが、模擬記者会見実施日が7月になるため、ノーネクタイ・半袖で実施しても良いことにしている。司会役も基本的に院生が担うことで、複数のマスコミ役の質問を「整理」する経験も含んでいる

表1 模擬記者会見で使用した想定問答集の一部（2021年実施分）

| | Q | A |
|---|-----------------------|--|
| 1 | 遠足の行程を教えてください。 | 5月8日（土）に、貸し切りバス（宮崎交通の大型バス：乗車定員55名（正シート45名＋補助席10席））で、午前9時に学校を出発し、午前9時15分に加江田溪谷入り口の丸野駐車場（無料、100台）で下車。その後、徒歩で硫黄谷休憩所や広河原休憩所での休憩を取りながら、多目的広場（3.2km）に午前10時30分に到着。その後、午前11時50分までレクリエーションを行い、昼食を含めた自由時間を午後2時30分まで取った後、同様のルートに戻って午後4時に学校へ到着という行程です。 |
| 2 | 遠足に同行していた職員は誰か。 | 1組・2組の学級担任（2組学年主任）が2名、特別支援学級の担任が1名、養護教諭1名、教務主任（理科専科）1名が同行、宮崎自然休養林管理事務所の職員の方1名に先導してもらった。 |
| 3 | 列のどの児童が刺されたのですか。 | 広河原休憩所から多目的広場までの道中、先頭の1組が出席番号順、2列縦隊で歩いていた際に、1組の中央付近の男子児童3名、女子児童2名が刺されました。 |
| 4 | 先頭の職員は巣の存在に気付かなかったのか。 | 枝葉が密集して生い茂った木の洞の中にスズメバチの巣があったため、目視で確認することができませんでした。スズメバチが飛んでいる様子も見られず、羽音やカチカチといった警告音も聞こえませんでした。 |

（中略）

| | | |
|----|---------------------------|--|
| 49 | この遠足で、どのような危機を予測していましたか。 | 河川敷ということで、水難事故、遊んでいる時の多少の擦り傷などを想定していました。 |
| 50 | その後の5人の学校での様子を教えてください。 | その後は欠席することなく、5人とも落ち着き、学校生活を過ごすことができています。 |
| 51 | 保護者から訴えられたときはどのように対応しますか。 | 誠実な対応をしていきます。しっかりと話を聞き、保護者の気持ちに寄り添った対応をしていきます。 |

| | | |
|-----|---------------------------|---|
| 5 2 | 保護者会はいつ、どのぐらいの規模で行ったのか。 | 保護者会は●日後に、遠足に参加した学年の保護者を対象に行いました。 |
| 5 3 | 蜂に刺された児童の保護者への対応を教えてください。 | 一人一人怪我の状況を確認し、当日の様子も含めて話をしました。また、校長と学年主任と担任で謝罪をしました。再発防止について約束をしました。 |
| 5 4 | 蜂に刺された児童の保護者の反応を教えてください。 | 再発防止についてと、徹底した安全管理についての話ができました。初めは、厳しい表情をされていましたが、一人一人丁寧に説明を行い、最後は理解をしてもらったと感じています。 |

想定問答集作成に時間がかかるため、模擬記者会見については、開始日の1ヶ月前に授業内容を説明した上で、想定問答集を作成するようにしている。項目数は、例年50問前後であるが、授業では実際に記者会見を経験した実務家教員から、わずか一晩で100問程度作成した経験がある旨が説明される。想定問答集作成時には、実務家教員からの助言も受けられる。

模擬記者会見時の質疑応答では、マスコミ役として本演習を受講していない院生からの協力を得ている。当然ながら、マスコミ役の院生は、マスコミに知らせたくない事実を知らない。実務家教員もマスコミ役を担うが、基本的に院生優先で質問させる。質疑応答が一通り終了したら、解題として記者会見の主旨説明とマスコミに知らせたくない事実を明らかにする。

受講生の声

さすまた実技は、ストレート院生は教育実習で現場に置かれているのを見たことがあるが、実際に触ったことがないので、重量感も含めて驚いたという感想であった。現職院生は、行政研修等で使用した経験があるが、現場にあるさすまたはスチール製で重い場合が多く、アルミ製の軽量タイプに初めて触れたという感想があった。いずれにせよ、実際にさすまたをもつことによってえられる身体的感覚を実感していることがうかがえる。不審者制圧については、難易度が高いとの指摘があったが、チームプレイで対応することの重要性を学べたという意見もあった。時間的制約があるが、基本的な使用方法是実感したことが指摘できる。

防災教材 EVAG 使用については、次の通りである。

ゲーム感覚で災害時の避難行動を考えることができる防災教育教材（EVAG）の存在を初めて知った。普段、防災教育を行う際は、状況に応じて避難を行う際のルートを、校舎配置図をもとに考えさせたり、災害を想定した避難訓練を行う以外は、受け身の学習（実際の映像を見て考えたり、経験談や物語を通して考えさせる等）が多い。だからこそ、楽しみながら取り組めるカードゲームは、とても良い教材だと思った。属性カードを引くことで、自分ではない様々な周囲の人の立場から、避難行動を考えることができるので、困った時に助け合うことの大切さにも気付くことができるような気がした。（以下略）

カードゲームは教材として一般的ではないが、受講生が勤務校に戻った後に今回使用したEVAGのような業者によって開発された教材を活用することに期待したい。

模擬記者会見では、日々の生活においてTVなどで記者会見を見たことがあるが、実際に実施したことがなかったので、実施してみるととても大変だったという感想が多かった。もっとも、教員人生において実施する可能性は低いが、いざ実施する際に不手際があってはならない

ので、今回の演習での経験は、貴重であり大変有意義であったという感想もあった。負担感は、想定問答集作成で占められていたので、今後は想定問答集作成時の負担軽減の方策をとることで対応したい。

4. 小括

実技導入の成果は、理論と実践の往還である。学部の教職課程での講義では、座学中心になりがちであることと、実地見学や実習でも危機管理の項目について、実際に目の当たりにすることが難しいことである。

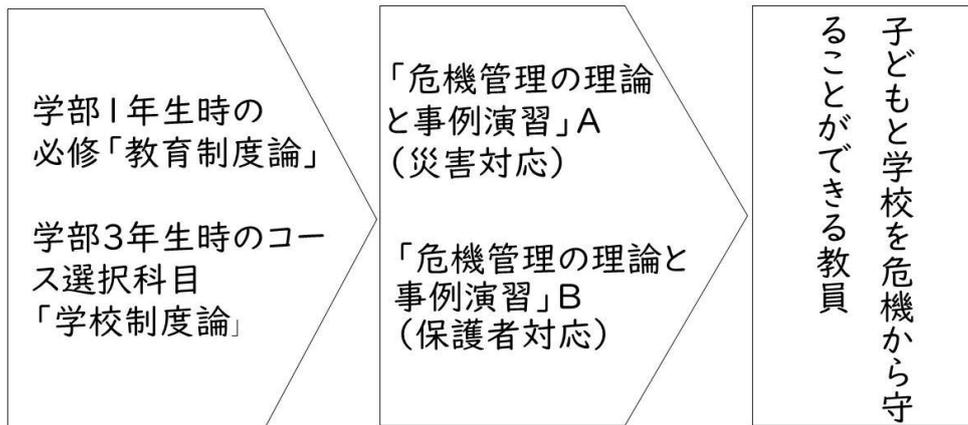


図1 学部の授業との連続性

出典：本文の記述にもとに著者作成。

「さすまた」は実技演習として実施し、模擬記者会見はロールプレイという形で教職大学院の授業で実施した。「さすまた」は、習熟するのに長期の時間が必要であるが、少なくとも警備用の機器を直接接触することで教師として不審者に対する「児童生徒の安全確保」の心構えは、得られていると考える。模擬記者会見は、伝えるべき情報の取捨選択と出し方にとどまらず、伝える際の姿勢まで、経験者からの指導助言を受けられる。「アカウントビリティの原則」を実践することの困難性を体験できるようにしている。両者とも受講生からの評価は、貴重な経験ができた等、好評であるので、今後も継続実施したい。

ただし、想定問答集作成の負担が大きいため、ひな形を事前に配布するなど負担軽減を試みることにする。

注

1) EVAG の価格は 8500 円（税別）である。2022 年 3 月下旬に災害対策基本法改正に対応するためリニューアルされる予定である。

引用・参考文献

田中正博・佐藤晴雄『教育のリスクマネジメント—子ども・学校を危機から守るために』時事通信出版局、2013 年。

『青少年赤十字防災教育プログラム まもるいのち ひろめるぼうさい』日本赤十字社、2015 年。